

ザンジバルにおける日本製タイルの流通と利用

—タイル考古学的アプローチ—

長崎大学 増田 研

兵庫県立考古博物館 深井明比古

Archaeological Study of Japanese Tiles in Zanzibar of Tanzania

Ken Masuda (Nagasaki University)

Akihiko Fukai (Hyogo Prefectural Museum of Archaeology)

要 旨

日本と東アフリカのあいだのヒト、モノ、情報の交流は、いわゆる「日本—アフリカ交流史」として1960年代から少しずつその実態が明らかにされてきた。なかでも近代の人的交流については多くのことが判明しており、九州北部地域出身の人々がすでに明治時代から東アフリカに居住していたことが分かっている。本研究は日本—アフリカ交流史の探求において手薄であった「モノの交流」を明らかにする取り組みの一環として、日本製タイルの流通に着目するものである。筆者らは2017年から2018年にかけてタンザニアのウングジャ島（ザンジバル）にて日本製タイルが墓地やホテルにおいて使用され、かつ、骨董品として流通している状況を確認し記録した。こうした日本製タイルの多くは大正時代から昭和初期にかけて淡路島や名古屋、岐阜で生産されたものである。本論文ではそうしたタイルの「身元」を、考古学的手法を用いて同定し、その使用実態を記述することを通して、20世紀前半に日本製タイルが東アフリカにまで流通していたことを主張する。

キーワード：マジョリカタイル、日本—アフリカ交流史、ザンジバル、考古学、物質文化

Abstract

This article discovers that made-in-Japan decorative tiles (*majolica* tiles) were distributed and utilized as construction and furniture materials before WWII in Stonetown of Zanzibar, Tanzania. Historical interaction of people, goods and information between Japan and Africa has been described since 1960s, however, there are few studies on trading of in-

dustrial products beyond the Indian and Pacific oceans, between African Continent and Asia. Research at two curio-shops suggests possibility of Japanese tiles were used in the town between 1920s and 1940s. Old Japanese tiles are found re-used as decoration of hotel walls and assembly parts of (Indian-) British style furniture nowadays. Broken pieces of tile among construction rubble on the seashore of the town include majolica. And archaeological research at two cemeteries proves the fact that tiles produced by Japanese tile manufactures – Danto Kaisha in Awaji-shima, Sato Tile Works in Gifu, Saji Tile Works, Fujimi-yaki Tile Works, Tsukiboshi Kentosha (M.S Tile Works) and Yamada Tile Works in Nagoya – covered wall of graves. One example is a tomb of a Sultan family member; the tomb had used 142 tiles, for decorating walls. Six types of tiles were adopted, most of which are confirmed as those produced by Sato Tile company by archaeological research methods. Authors are convinced that Japanese *majolica* tiles were imported for decorating constructions in Stonetown of Zanzibar in 1920s at the earliest, even though those are mostly removed during the second half of 20th century.

Key Words: Ceramic Tile, Japan-Africa Relation, Zanzibar, Archaeology, Material Culture

1. はじめに

本研究は、タンザニア連合共和国ザンジバルにおいて近代の日本製タイルが流通していた可能性を検討し、日本－アフリカ交流史に新たな光を当てることを目的としている。

アフリカ大陸およびその周辺部と東アジアとの関係については、数多くの歴史的断片をつなぎ合わせることでその歴史的な関わりを明らかにすることが試みられてきた。近代においては、明治期にすでに多くの日本人がアフリカに渡っていたことが明らかになっている（青木 1993、2000、2007）。青木澄夫によれば、大正10年（1921）年にウガンダで農場を経営していた日本人、山野辺義昭が報告した東アフリカ在住日本人は26人で、そのうち長崎県出身者は18人である（青木 1993：260）。また1933年の外務省資料（海外各地在留邦人人口表）では東および南部アフリカに在住する日本人は83人であり、職種は多様であるものの半数近い39人は会社や店舗で仕事に従事する「従属者」と分類されている（青木 1993：266）。ザンジバルに関しては白石（1995）¹が、明治から昭和にかけての時期に長崎や熊本出身の女性たちがザンジバルに居住していたことを明らかにしたが、彼女らもまた飲食店で働く「従属者」であった。このように明治以降、商業目的や会社からの派遣、あるいはザンジバルにいた女性たちのような「アフリカへ流れ着いた「からゆきさん」といった人々が、さまざまな事情によってアフリカに渡っていたのである²。

ヒトの交流に関する研究がこのように成果をあげている一方、物質文化（モノ）の交流

については研究の取り組みは少ない。日本—アフリカ交流史をひもとくことは、近代日本社会そのものを照らし出す端緒となりうるにも関わらず（増田 2008）、モノの交流が未開拓の領域として残されたままなのである。こうしたなか、次のような数少ない取り組みが成果をあげていることも確かである。野上（2008）はアフリカ各地での肥前磁器（「伊万里」）のアフリカ各地での出土状況を整理し、川畑（2018）は戦後の日本製陶器がザンジバルで使用されていたことを突き止めている。日本の近代楽器である大正琴や日本製の布もまたザンジバルでは人気を博していたという。

このような背景のもと、筆者らが着目するのはザンジバルにおける日本製タイルの流通である。増田は2018年の9月にストーンタウンの骨董店において10枚の日本製タイルを入手し、タイル流通研究の可能性を論じた（2018）が、本稿はその先の展開を目論んでいる。すなわち、ザンジバルにおいて実際に日本製タイルが使用されていたことを確認することが、本研究にとってはもっとも重要な課題なのである。

本稿で中心的な検討対象となるのは、日本製のタイルのうち、とくに大正期から昭和戦前期にかけて製造された色彩豊かなタイルである。これらのタイルはヴィクトリア朝期イギリスで製造されていたいわゆる「ヴィクトリアンタイル」のデザインの模倣から始まり、のちに日本オリジナルのデザインも加わって戦前期にかけて大量に生産され、また世界各地に輸出された。こうしたタイルには「和製ヴィクトリアンタイル」「日本製マジョリカタイル」などいくつかの呼び方があるが、ここでは一般的によく使われる「日本製マジョリカタイル」あるいは単に「マジョリカタイル」と呼ぶことにする（世界のタイル博物館 2013）。

日本におけるタイルの大量生産は、明治40年代に名古屋の不二見焼合資会社および淡路島の淡陶株式会社が、乾式成形による硬質陶器タイルの生産技術を確立したことで可能となった。大正時代末期には、関東大震災の復興需要とともに成長し、中国、東南アジア、インド、アメリカ大陸にむけて輸出を開始した。昭和20年までにタイルを製造していたメーカーは50社あまりに上る（『日本のタイル文化』編集委員会 1976：172）。昭和9年から10年にかけて実施された調査では、マジョリカタイルを含む硬質陶器タイルの製造業者は全国に15社を数えるが、毎月の生産枚数は佐治タイル（名古屋）が87万枚、不二見焼合資会社（名古屋）が73万枚、月星建陶社（名古屋）が66万枚と膨大で、淡陶（淡路島）にいたっては月産100万枚を超えていた（株式会社 INAX 日本のタイル工業史編集委員会 1991：173）。

日本のタイル産業については株式会社 INAX によって情報が整理されているが（株式会社 INAX 日本のタイル工業史編集委員会 1991）、名古屋を中心とするタイル産業についても業界団体による記録が残されている（名古屋陶磁器会館 1987、中部タイル業組合 2000）。しかしながら本稿で言及する製造会社の多くがすでに廃業していること、また、存続しているメーカーについても戦前の輸出記録は失われており、タイル流通史の解明は実際に使用されているタイルの同定に頼るほかない。こうした状況においては、タイルの出土例の考古学的検討を通じた検討が行われていることに注目すべきであろう。たとえば淡路島の淡陶社製タイルについては、その源流となる珉平焼窯跡の発掘によってタイル製造の変遷の詳細が明らかになっている（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005）。この発掘を通じて、淡陶タイルの裏型による編年を作成した深井は、考古学手法による出土品の記載・分類と、現存するタイルの使用例やカタログなどの情報を統合した「タイル考古学」を提唱している（深井 2008、2009、2015）。

日本製タイルの海外輸出については、豊山(2015、2016)がインドにおける日本製マジョリカタイルの受容を論じているほか、堀込(2011)が台湾、Pinto-Rodrigues と Lim(2015)や深井(2011a、2011b)がシンガポールやマレーシアにおける利用例を報告している。その一方で、ザンジバルを含むアフリカへの日本製タイルの輸出は、資料に見られる断片的な記述によってのみ示唆されてきた。例えば『日本のタイル文化』には次のような記述がある。

昭和9年8月、商工省告示第61号によって、硬質陶器タイルの輸出は、数量・価格の統制を受ける。当時の輸出先として満州・関東州・中国・インド・インドネシア・フィリピン・オーストラリア・中近東・アフリカなどが挙げられる。タイルは、白色・霜降・色物で、マジョリカは、二等品以外は輸出禁止とされた。（『日本のタイル文化』編集委員会 1976：110）

また、『近代日本陶業発展秘史』（伊勢本 1950）には、戦後の昭和24年（1949年）1月から9月までの間に名古屋港から積み出された食器類の輸出先のひとつとして「ザンジバル」の名が記録されている（伊勢本 1950：99）。ただしタイルについては名古屋港からザンジバルに宛てて直接輸出された記録はない（同：102）。他方で、戦前のものと考えられる佐治タイル社の絵はがきには、輸出先のひとつとしてザンジバルの名が見られる³。

こうした背景のもと、本研究は墓地調査を中心とした複数の方法によって、20世紀前半に日本製マジョリカタイルがザンジバルに流通し、使用されていたことを明らかにする。そのためのアプローチとして本稿ではタイル考古学を採用する。タイル考古学は深井によって提唱された方法論であり、「タイル資料を考古学的手法で成形・規格・形態・文様種類・釉薬などを分類し、近代建築等に現存するタイルやカタログなどの資料を含めて編年し、当時の社会・生活・文化などの実態や変化を解明する」（深井 2015：59）アプローチである。

2. 調査地および調査方法

2.1. 調査地

調査対象地はタンザニア連合共和国の、いわゆるザンジバルと呼ばれる2つの島（ウンゲジャとペンバ）のうち、ウンゲジャ島のストーンタウンである。ザンジバルは古来よりアラブとの間のインド洋交易の拠点のひとつであったが、16世紀初頭のポルトガルによる征服ののち、17世紀末からはオマーン帝国の統治下にはいった。19世紀初頭のサイド・サイド王の時代以降、ザンジバルはスルタンをいただく独立国となり、1890年から1963年までザンジバル王国はイギリスの保護下に置かれた。1963年に独立したものの翌年にはアラブ系住民に対するアフリカ系住民の蜂起があり、いったんはザンジバル人民共和国として独立したが、大陸側のタンガニーカと併合したことで1964年4月には新たに成立したタンザニア連合共和国の一部となった。

本稿で取り上げる日本製タイルの流通時期は、ザンジバル王国の時期、とくに第9代スルタンであるハリーファ・ビン・ハールブ（在位 1911-1960）から第10代アブダッラー・ビン・ハリーファ（在位 1960-1963）にかけての時代と重なる。

2.2. 調査方法

本研究では、墓地において実際に使用されているタイルの調査を主たる目的としたが、補助的な資料収集として骨董店における在庫調査、海岸における分布調査、ホテルにおける利用調査を実施した（図1）。分布調査は2017年9月、2018年1月および9月に、墓地における実測調査は2018年9月に実施した。

(1) 骨董店での在庫調査

ザンジバルで使用されていたものが中古品として流通している可能性があるため、その在庫を観察することで製造国や製造年代の分布を確認した。日本製であることが確認できるものについては一部を購入し、使用歴などを詳細に検討した。

(2) 海岸での分布調査

ストーンタウンの海岸部には建築廃材と考えられる屋根瓦、煉瓦、珊瑚石、コンクリートなどに混じって、数多くの陶磁器片が散乱している（図2）。こうした、いわば瓦礫のなかに、モルタルが付着したタイル片を発見し、採集した。タイル片のなかにはモロッコ製と考えられる象嵌タイルのほか、単色タイルおよび多彩のマジョリカタイルもあったが、いずれも裏型からは製造地は判断できなかった。

(3) ホテルにおける利用事例の検討

ストーンタウンのホテルにおける利用事例を調査した。マジョリカタイルが家具や壁面で利用されていることが確認されたのはテンボホテル、エマーソン・オン・フルムジ、エマーソン・スパイス、ダウ・パレスホテルの4箇所である。

(4) 墓地での使用事例調査

対象とする日本製タイルの製造年代は大正期から戦後にまでわたるが、中古品の再利用ではなく、流通当初からそのまま継続して使用されていた可能性が高い場所として、墓地における使用事例の調査を行った。実測調査を行ったのは、博物館に併設されているスルトン家の墓所と、ストーンタウン郊外に位置するボホラ墓地である。

3. 現在の日本製タイルの分布

3.1. 骨董市場にストックされている中古タイル

筆者らはザンジバルで流通する中古タイルの分布調査を目的として、ストーンタウン中心部にある二ヶ所の骨董店において在庫・陳列されている日本製タイルを確認し、一部を入手した。骨董店はいずれも土産物と骨董品を扱う店舗である。骨董店の在庫は、商品個別の来歴が消されているために、それらがザンジバルで使用されていたことを直接に示す

ものではない。しかしながら、そこで把握された分布や年代は、ザンジバルにおける日本製タイル利用の実態把握の参考になる。筆者らが目にしたタイルは、骨董店が保管するタイルの一部に留まると考えられ、また後述するような入手経緯を考慮すると、ここで店頭にならぶ日本製タイルの多くが過去にザンジバルで使用されていた可能性は極めて高い。

骨董店にあるタイルはいずれも中古品で、日本製のほかイギリス製やオランダ製、ベルギー製、モロッコ製、インド製などが確認された。日本製タイルはすべてが多彩施釉の硬質陶器タイル、すなわちマジョリカタイルであった(図3)。日本製であるとの認定はメーカーが分かる場合はその裏型によるが、メーカーが不明であっても「MADE IN JAPAN」の刻印やスタンプがあるものを日本製もしくはその可能性が高いものとして扱った。入手したうち、6×6インチ(152mm角)の正方形タイル43枚のみ図3に掲載している。

図3に挙げた43枚の製造元は、淡陶が14枚、佐治タイルが7枚、不二見焼合資会社が9枚、佐藤化粧煉瓦工場と月星建陶社が4枚、日本タイル工業が2枚、そして日本製であると推測されるもののメーカーが不明なものが3枚あった。筆者らが入手した当時のカタログや、すでに判明している裏型の編年を考慮すると、その多くが大正中期から昭和の戦前期までに製造されたものである。少なくとも、こうしたマジョリカタイルは戦後ほとんど生産されなかったため、これらが戦前に生産されたものであるのは間違いない。淡陶社のタイルについては深井が作成した裏型の編年があり、これに基づいて製造時期を推定すると、すべてが大正から昭和初期にかけてのものであった(表1)。

これら骨董店の在庫品は、ザンジバルにおいて解体された内装や家具、それに墓地からの流れ込みを中心として構成されている。墓地からもたらされたものの多くは裏面の接着剤やモルタルが付着したまま倉庫に保管されているという。

これらの在庫タイルは、接着剤やモルタルの付着、表面の汚れや傷などを観察することで、以前の使用歴をある程度推測することが可能である。それらは床面で使用されていたもの、壁面で使用されていたもの、家具で使用されていたものに分けることができる。床面で使用されていたと推察されるものの多くはモロッコやインドで製造された象嵌タイルであるが、マジョリカタイルの一部にも表面の割れや欠けの状態から床面で使用されていた可能性の高いものがある(図4)。

壁面で使用されていた可能性があるのは、表面のワレや欠けがなく(あるいは、少なく)、裏面にモルタルの付着があるものである。この場合の「壁面」には、建物の外壁、内壁のほか、後述するような墓地における棺の外壁での使用が含まれる。

家具での使用が示唆されるものには、裏面に接着剤やモルタルの付着がなく、かつ、表面の周囲に特徴的な汚れや塗料の付着が見られる（図5）。古いコーナーキャビネットやサイドテーブルにおいてタイルがはめ込まれていた可能性が高いが、こうした家具は1960年代ころに安価な家具が流通したことにより多くが廃棄されたという。

3.2. 海岸で採集したマジョリカタイル片

ストーンタウンには干潮時に歩くことができる海岸線が1.3kmほどあるが、一部には建築廃材などの瓦礫が多く散乱する（図2）。海岸で採集できたマジョリカタイル片はひとつのみである（図6）。これはカタログ番号でいえば佐治タイル835番、佐藤化粧煉瓦工場の95番、淡陶の556番などに見られる、よく知られたデザインのものである。この拾遺品の裏型からはメーカーを特定することはできなかったが、ザンジバルにおいてマジョリカタイルが実際に使われていたことの間接的な証拠となる。

3.3. 中古品の二次利用とおぼしき事例

マジョリカタイルは外壁、内壁いずれでも用いられる。外壁での利用についてはプラナカンのショップハウス例（Pinto-Rodrigues and Lim 2015）や、日本の銭湯などの例がある。20世紀前半のザンジバルにイギリス製や日本製のマジョリカタイルが流通していたとすれば、建築物壁面での利用が中心であったと推測されるが、ザンジバルではいまのところ、古写真などをあたって建築物壁面での利用事例は見つかっていない。

他方で、現在ではストーンタウンに所在する複数のホテルにおいて日本製マジョリカタイルの利用例が多数見られる。その多くはサイドテーブルやチェストなどの家具への組み込みである。イギリス保護領時代に広く用いられた木製家具には装飾としてマジョリカタイルが多く用いられたが、これらの多くは1970年代に廃れたという。現在見られる家具は、近年、家具職人に依頼して「復刻」させたものであるという。

図7には家具および壁面での二次利用例を挙げた。7-1はエマーソン・ホテル（Emerson on Hurumzi）のロビーにある家具だが、ここには同じデザインの淡陶製3枚、佐治タイル製1枚が使用されている。いずれも中古品の二次利用と考えられる。またテンボ・ホテル（Tembo Hotel）入り口のベンチスペース、ダウ・パレスホテル（Dhow Palace）のレセプションには壁面に埋め込まれた多数のマジョリカタイルを見ることができるが、裏型は確認できないものの、その多くが日本製であるとみられる。

4. ストーンタウンの墓地における利用例

4.1. 墓地調査の目的と方法

戦前の日本製マジョリカタイルがザンジバルに流通していたことを証明するためには、その時期から現在にいたるまで継続的に使用されている事例を見ることが必要である。ザンジバルは1960年代の政変で町が荒廃したこともあり、建築物の壁面に埋め込まれたままの状態のタイルを見ることは難しい。本研究では継続的使用の事例として、墓地に着目する。対象としたのはスルタン家の墓所における棺一基、および郊外のボホラ墓地における5基である。いずれの例でも、かつて棺を覆っていたタイルの多くは失われているが、かろうじて残るタイル片や裏型の痕などを確認することでデータの収集が可能である。

4.2. スルタン家の墓地

スルタン家の墓地はストーンタウン北西海岸沿いのパレスミュージアム東に隣接し、その面積は約1,400㎡である。墓地は東西方向の通路を隔て、白壁に囲まれた北地区と南地区に分かれる。南地区はさらに通路により東部と西部に分かれる。

北地区は2区画、2基がある。南地区東部の北東隅は煉瓦壁で区画されたスルタン王の墓域で、11区画のうち墓は2基、東部には22区画のうち8基が墓である。南地区西部は47区画あり、そのうち墓は10基程度である。以上墓地全体の区画は82、墓は22を数える。墓はいずれも一人用の棺と考えられる。

これらの墓でタイルが使用されているのは、北地区に2基、南地区西部に1基存在する。北地区の2基は基壇や上部の棺外面の全てに白色6インチ正方形のタイルを使用し、四隅にはモスグリーンの同形タイルが使用され、小口部の造型部の端部は切断し整形されており、全面タイル張りの棺である。

南地区西部の墓は南北通路の南端西側に位置する。墓地群で唯一棺外面に6インチ正方形の日本製と考えられるマジョリカタイルが使用されていることから、棺の外形実測やタイルの状況調査を実施した。なおこの墓にはアラビア語による墓碑があり、第9代スルタンであるハリーファ (Khalifa bin Harub、在位 1911-1960) の最初の妻マトゥーカ (Sayyida Ma'atuka bint Hamud Al-Sa'idiyah、1882-1940) の墓と記される。以降マトゥーカ墓と呼称する (図8)。

マトゥーカ墓の棺の外寸は東西全長276cm、南北幅146cm、東高さ157cm、西高さ104

cmである。内寸は東西215cm、南北95cm、深さは不明である。なお南側は新たに造られた墓が被っているため外面のタイルの存否は不明である（図9）。

棺上部はモルタル造の壁で立ち上げられ、長方形を呈する。頭部と脚部には雲形の造形があり、頭部がやや大型であるのに対し脚部はやや小型である。また四隅に円柱状のモニュメントが造られたが上半は欠失している。

下部構造は不明だが、当地のイスラム墓の構造は長方形の墓壙を掘削し、墓壙底部の長辺部分を横穴状に掘り抜け、そのスペースに遺体を白布に包み、左肩を下にして横臥伸展葬とする。その後は遺体が中央に倒れないよう板材で仕切りし、最終的に墓壙を土で埋め戻す⁴。

タイルは頭部（東外面）、側面（北外面）、脚部（西外面）、両側の上面に使用されている。しかし殆どが剥がされたうえに、白色塗料（漆喰か）が全体に塗布されており、往時の状況は想像できない。

棺に残るタイルは殆どが破片であり、その数は30枚である。なおエンボスタイル裏側の痕跡を含めると総数40枚の文様が判明した（表2）。また棺全体で使用されたタイルは剥がされた痕跡や配置を復元し、総数142枚と推定した（表2）。

タイルを詳細に観察すると色鮮やかな色彩と花柄文様等が施されたマジョリカタイルであることが判り、剥がされた跡にタイル裏側の金型文様が残ることから乾式タイルであることが判明した。またタイル中央には生産者を記すトレードマークも見られる。タイル裏型（裏あし）の痕跡を詳細に観察すれば、生産時期や生産者判明につながる（図10）。今回の調査では多数の裏型が観察できたことから、生産者や時期確定に有効な資料となった（表3および図11）。

タイルは表3に示すようにA～Fの6種類が確認され、表文様は花柄基調とデザイン文からなる。Fは残存しないものの、裏型に表れる文様の凹凸が剥離面に残存していたことからバラ文様タイルと推定した（図10-2）。いずれも日本の各社が生産していたものである。

裏あしの痕跡が確認されたものは2種86枚で全体の60.6%である。エンボスタイル（図10-2）10枚を除けば全て縦横方形区画内に横細線が施された型式（図10-1）で占められる。生産者印は正円内に六芒星が描かれ、その内側に「ST」があしらわれたものがある。この印は佐藤化粧煉瓦工場（岐阜県）が昭和5年以降、終戦前の生産中止まで使用していたものである。なお生産者印が判明した28枚全てが同社製品を示すことから裏型aは同社

の製品と考えられる。

マトゥーカ墓はザンジバル革命などの政変による荒廃を経て、タイルの殆どが剥がされた。その結果裏型文様が露出し、タイルの生産者や生産時期の推定に繋がる希有な例となった。使用されたタイルの種類と場所の推定にもとづき、かつての姿の復元を試みたものが図12である。

マトゥーカ墓では生産者が判る資料の全てが佐藤化粧煉瓦工場製のタイルであることから、各種類のタイルが一括で使用されたと考えられる。この裏型は編年上、昭和10(1935)年代と考えられていることや(株式会社 INAX 日本のタイル工業史編集委員会 1991: 194)、第二次世界大戦終戦前の資料であることを裏付ける発掘資料が出土していることから⁵、昭和10年(1935)～昭和17(1942)年頃の生産中止時期までの生産を示すものである。造墓時期がマトゥーカの死亡年1940年頃であるとする、タイル生産時期と墓に使用された時期が符号する。

4.3. インド系ムスリムコミュニティのボホラ墓地 (Bohora Cemetery)

ボホラ墓地はストーンタウンの南東、ナジ・モジャ・グラウンドの東側に位置する。ザンジバルに在住するインド系ムスリムコミュニティの集団墓地で、南北約100m、東西約100m、約10,000㎡に約200基の墓が列ぶ。

1970年に撮影された写真(図13)では棺を覆う寄棟状の屋根一面にマジョリカタイル5種類が見られる。これらのタイルは戦前に日本において大量に生産されていたものと同種であることから、この墓の存否やその他の墓のタイルの使用状況等を調査した。

墓はいずれも東西方向に設置された伸展葬の単独棺で、大半が当地の建造物の造り方と同様にサンゴ塊を混ぜ込んだ躯体を構造体とし、外面に漆喰塗りしたものであるが、一部に大理石板を被覆したものも見られる。

棺全体をタイルで張られたものが数基見られたが、経年変化が見られず近年に造墓されたものと思われる。なお図13の一面にマジョリカタイルが張られた棺は確認できなかった。この墓地の敷地縁辺部では改修が行われていることや、棺に張られたマジョリカタイルが剥がされ骨董店に持ち込まれるケースも多いと聞く。したがって墓地改修や意図的な改変により、マジョリカタイルに覆われた華やかな棺は現存しないと考えられる。

ここでは、マジョリカタイルの破片が残るものや無地タイルを床などに使用する箇所までタイル裏面が観察できた5基を記載する。便宜上、1号墓から5号墓までの番号を付した。

1号墓(図15)は墓地中央からやや西寄りに位置する白壁で茶色トタン屋根建物(以降「建物」と記載)の北東方向約20mにあり、棺は東西194cm、頭部幅76cm、脚部幅73cm、高さ99cmを測る。タイルは東の床に5枚、西の床に4枚張られたが、西側に1枚の1/2程度が残る。タイルは6インチ平で、4区画に井桁状文様が2区画に描かれたマジョリカタイルである。サイズは一辺152mm、厚さ9mm、裏型は縦横方形区画内に横細線が見られ、中央には円形区画内に星型の一部が確認できることから、佐藤化粧煉瓦工場製の可能性が極めて高い(図15-1参照)。グジャラート語の碑文によれば被葬者の死亡時期は1938年6月である。タイル裏型は王宮墓のマトゥーカ墓に使用されたものと同型であることから、このタイルが佐藤化粧煉瓦工場タイルと仮定すれば製造年代が昭和10(1935)年代であり、墓碑記載の年代と符号する。

2号墓(図16)は建物の北東方向へ約5m、南北列北方にあり2棺が一つの区画に造られている。北棺は1951年11月に大理石で造られたもので、東西149cm、南北57cm、高さ104cmを測る。南棺はモルタル仕上げで、東西172cm、南北65cm、高さ107cmを測る。二つの棺の床は共通で東西200cm、南北151cm以上に薄緑色6インチ平のタイルが張られている。表面端部がやや丸みを帯びるクッションエッジタイルである。一辺152mm、厚さ6.5mmで裏型は縦横方形区画内に横細線が施され、中央の区画には稜線による小型の菱形の中に「DK」が確認できたことから、淡陶株式会社製(兵庫県淡路島)であることが判明した(図16-3 18-1参照)。これは淡陶のタイルH1に分類され(兵庫県教育委員会 2005:225-257)、およそ昭和10(1935)年以降、昭和52(1977)年頃まで生産されたタイルの裏型である⁶。墓碑に記された年代はこのタイル裏型年代の間に位置づけられる。

3号墓(図17)は建物の北方へ6mに位置する。1954年に建てられ大理石が使用されている。規模は東西148cm、南北57cm、高さ105cmを測る。床面は224cm×132cm、総数86枚(内8枚欠損)の白タイルが確認できる。タイルは6インチ平、一辺152mm、厚さ5mmと薄い。東西角から西へ3枚目のタイルが剥がれており、裏型は井桁に細線で中央の区画には小型の菱形の中に「KY」、その上端に「TRADE MARK」、下端に「MADE IN JAPAN」が確認できたことから山田タイル製(愛知県)であることが判明した(図17-3 18-2参照)。なお山田タイルでは昭和22年~27年の輸出品を示す「OCCUPIED JAPAN」印が記されたマジョリカタイルや1951年の白無地試作品が保管されている。これらの保管資料はボホラ墓地3号墓で確認された裏型の型式と同一である。これらから山田タイルの生産時期と3号墓の造墓年代とは符号する⁷。

4号墓(図19)は3号墓の5基南で、建物の東方向へ約20mに位置する。被葬者の死亡時期は1942年12月である。モルタルにて構築され、東西158cm、南北49cm、高さ86cmを測る。タイルは東方(頭部)の床面にあり、北からグレー・不明・薄緑・赤色タイルが一枚ずつ張られている。グレータイルのサイズは6インチ平、ストレートエッジで厚さは10mm。裏型はストライプに縦長方形などがあり、「52DP S F?」の刻印が確認されたが生産者は不明である(図19-3参照)。

5号墓(図20)は建物の東北東方向へ約20mで、東から4列で北から2基目に位置する。造墓時期は不明である。大理石仕上げで東西152cm、南北62cm、高さ101cmを測る。平面基部は2段構成で、上下段との差は10cm。上段は38枚、下段には162枚の白無地6インチ平タイルが存在する。上段南隅でタイルの剥がれがあり、厚さ8mmで裏型はストライプ?タイルと考えられ、補修が一部に認められたものの、生産者は不明である(図20-3参照)。

5. 日本製タイルのザンジバルにおける流通

墓地での検証を通して、ザンジバルのウングジャ島、とりわけ国際的港市としてのストーンタウンに日本製のタイルが流通し、使用されていたことが判明した。スルタン家の墓所では佐藤化粧煉瓦工場が戦前製造したタイルが多数使用され、また、ボホラ墓地においても戦前から戦後にかけての日本製タイルが使用されていた。海岸の建築瓦礫に含まれていたタイル片は、ザンジバルの建築材にマジョリカタイルが含まれていたことを示唆し、骨董店の在庫品と、二次利用されている多数の日本製マジョリカタイルの存在もまた、名古屋や淡路島から輸出されたタイルが彼の地に流通していたことを示している。本研究の目的は果たされたと考えられる。

他方で、物質文化の交流史を解明するという点からは、まだ不明な点が多いのも事実である。残された課題の一つは「誰が輸出し、誰が輸入したか」という点である。またそれをもたらしたルートも不明である。すでに先行研究によって日本製タイルが東南アジアからインドにかけて輸出され、現在にいたるまで使用されていることは明らかとなっている。ザンジバルへの流通が、インドを経由した「再輸出」である可能性もあるが、そうした点も含めて日本-アフリカ交流史における「モノの交流」はまだ解明すべき点が多い。

墓地調査に関しては、本研究で発見された棺壁面のタイルが「造営時からそのまま残っている」ことを前提としている。改築の可能性などを考慮すると、本研究のアプローチは

不十分かもしれない。また日本のタイル産業における輸出、とりわけアフリカへの輸出の実態がいかなるものであったか、さらにはザンジバル側における輸入が誰によってどのように担われたのかなど、文献史的な探求も必要とされる。だが、剥離後の裏型・裏あしの確認によって使用の痕跡をたどることができるタイル考古学的アプローチが、物質文化交流史のなかでもとりわけ注目に値することは間違いない。

いずれにしても、個別のタイルの来歴を確認することは難しい。本稿では検討できなかった個々のタイルの詳細な考古学的検証については、別稿を用意することにした。

注

- ¹ 白石の『ザンジバルの娘子軍』は1981年に最初の版が刊行されているが、本稿では、白石による加筆を経た1995年の版を参照する。
- ² 長崎県からのアフリカへの渡航者については、増田（2008）がそのあらましを紹介している。
- ³ 筆者らは鳥瞰図絵師・吉田初三郎の筆になるとされる絵はがき「佐治タイル販売網 Panoramic Review of the Market of SAJI TILE」の存在を確認している。その絵柄では佐治タイルの販売網がザンジバルのほかケニアのモンバサ、南アフリカのケープタウンにまで伸びていることが確認できるが、その実物を所有していないため、本稿では画像の掲載を見送っている。
- ⁴ ギリッシュ・ザレラ氏の教示による。
- ⁵ 広島平和記念資料館耐震工事に伴う発掘調査の資料に基づく。（公財）広島市文化財団の楳木敬太氏のご教示による。
- ⁶ ㈱ Danto Tile 池田健氏のご教示による。
- ⁷ 資料の実見にあたっては KY タイル㈱山田吉康代表取締役の協力を得た。

謝辞

本研究の実施にあたっては多くのかたのご協力をいただいた。ギリッシュ・ザレラ氏と鈴木英明氏（国立民族学博物館）には、それぞれグジャラート語とアラビア語の墓誌の解説をお手伝いいただいた。楳木啓太氏（公財）広島市文化財団）はマトゥーカ墓の3Dモデルの作成で、小東憲朗氏（アブライドアート工房）はマトゥーカ墓タイル復元図の作成で、技術面での協力をいただいた。謝して記す。

引用文献

- 青木澄夫 1993『アフリカに渡った日本人』時事通信社
青木澄夫 2000『日本人のアフリカ「発見」』山川出版社
青木澄夫 2007「昭和前半期における名古屋経済人のアフリカへの関心：名古屋商工会議所の活動を中心に」『アリーナ』4：152-180
伊勢本一郎 1950『近代日本陶業発展秘史』技報堂
株式会社 INAX 日本のタイル工業史編集委員会 1991『日本のタイル工業史』株式会社 INAX
川畑容 2017「欠片から視るストーンタウンでの食器の変遷」増田研・阿部哲・寺野梨香（共編著）『現代ザンジバルにおける社会の動態：ローカリティとグローバル化のフィールドワーク』長崎大学多文化社会学部、pp.162-179
白石顕二 1995『ザンジバルの娘子軍（からゆきさん）』社会思想社（現代教養文庫）
世界のタイル博物館（編）2013『世界のタイル・日本のタイル』（第2版）LIXIL 出版

- 中部タイル業組合 2000『中部タイル業組合五拾年史』中部タイル業組合
- 豊山亜紀 2015「インドのマジョリカ熱：イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム21』32：83-88
- 豊山亜紀 2016「戦間期インドにおける日本製タイルの受容とその記号性」『社会経済史学』82(3)：35-50
- 名古屋陶磁器会館 1987『名古屋陶業の百年：会館の壁は聞いた百五十人の回想』名古屋陶磁器会館
- 『日本のタイル文化』編集委員会(編)1976『日本のタイル文化』淡陶株式会社
- 野上建紀 2008「アフリカに渡った伊万里」『アフリカ研究』72：67-73
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005『珉平焼窯跡：広域営農団地能動整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅰ』(兵庫県文化財調査報告第284冊)兵庫県教育委員会
- 深井明比古ほか 2005「珉平焼窯跡」『兵庫県文化財調査報告』兵庫県教育委員会284：232-236
- 深井明比古 2008「タイル考古学の魅力と意義：淡陶タイル編年と横浜山下居留地遺跡出土タイルについて」『タイルの本』4：10-16
- 深井明比古 2009「近代タイルの考古学的検証」『兵庫発信の考古学：間壁葎子先生喜寿記念論文集〔献呈編〕』401-412
- 深井明比古 2011a「プラナカン文化のタイル：シンガポール編」『タイルの本』45：5-9
- 深井明比古 2011b「プラナカン文化のタイル：マラッカ・ペナン編」『タイルの本』47：5-9
- 深井明比古 2015「タイル考古学の現状と課題」『兵庫県立考古博物館研究紀要』8：59-74
- 堀込憲二 2011「日治時期台湾近代建築外牆磁磚形式與色彩變遷之研究」『國立台灣大學建築與城鄉研究學報』18：19-48
- 増田研 2008「日本—アフリカ交流史から「日本」を照射する：江戸期～昭和初期の長崎を舞台にして」『アフリカ研究』72：53-59
- 増田研 2018「ザンジバルに渡った日本製マジョリカタイル」増田研・阿部哲・寺野梨香(共編著)『現代ザンジバルにおける社会の動態：ローカリティとグローバル化のフィールドワーク』長崎大学多文化社会学部、pp. 180-186
- Pinto-Rodrigues, Anne and Victor Lim 2015 *Peranakan Tiles SINGAPORE*, Aster By Kyra.



図1 ストーンタウンにおける調査地点

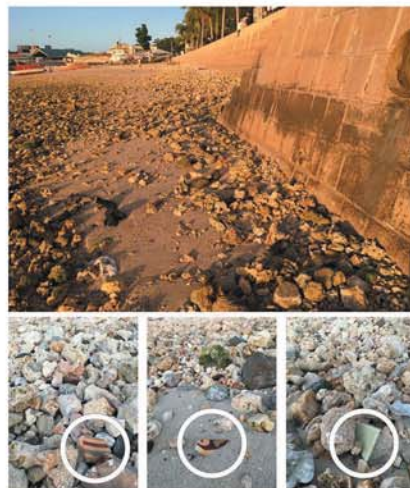
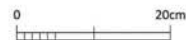


図2 海岸に散乱する瓦礫とタイル



図3-1 骨董店で確認された日本製マジョリカタイル





- | | | | | | |
|---|---|--|---|---|---|
|  |  | 15. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：壁面 |  |  | 26. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：未使用か |
|  |  | 16. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：815
時期：大正末～昭和初期
使用歴：壁面 |  |  | 27. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：壁面 |
|  |  | 17. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：大正～昭和初期
使用歴：壁面 |  |  | 28. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：不明 |
|  |  | 18. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：壁面 |  |  | 29. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：不明
使用歴：壁面 |
|  |  | 19. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：壁面 |  |  | 30. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和初期
使用歴：壁面 |
|  |  | 20. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：95
時期：大正末～昭和初期
使用歴：床面 |  |  | 31. 佐藤 (多治見)
カタログ番号：59
時期：昭和10年頃
使用歴：壁面 |
|  |  | 21. 佐治タイル (名古屋)
カタログ番号：811
時期：大正末～昭和初期
使用歴：壁面 |  |  | 32. 佐藤 (多治見)
カタログ番号：232
時期：昭和10年頃
使用歴：家具 |
|  |  | 22. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和10年頃以降
使用歴：壁面 |  |  | 33. 佐藤 (多治見)
カタログ番号：122
時期：昭和10年頃？
使用歴：壁面 |
|  |  | 23. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：不明
使用歴：不明 |  |  | 34. 佐藤 (多治見)
カタログ番号：243A
時期：昭和10年頃？
使用歴：家具 |
|  |  | 24. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：昭和10年頃以降
使用歴：不明 |  |  | 35. 月星建陶社 (名古屋)
カタログ番号：M73
時期：昭和10年頃
使用歴：家具 |
|  |  | 25. 不二見 (名古屋)
カタログ番号：不明
時期：大正後期～昭和初
使用歴：不明 |  |  | 36. 月星建陶社 (名古屋)
カタログ番号：M88
時期：昭和10年頃？
使用歴：家具 |

図 3-2 骨董店で確認された日本製マジョリカタイル (続き)





図 3-3 骨董店で確認された日本製マジョリカタイル（続き）

番号	生産者	カタログ番号	時期	裏型型式
1	淡陶	18	大正時代末	D2
2	淡陶	18	大正時代	E2
3	淡陶	18	大正時代末	D5
4	淡陶	17	大正時代末	D5
5	淡陶	17	大正時代末	D5
6	淡陶	12	大正時代中頃	D1
7	淡陶	14	大正時代中頃	C
8	淡陶	1662	昭和時代初期	F1
9	淡陶	1613	昭和時代初期	F2
10	淡陶	585	昭和時代初期	F1
11	淡陶	520 色違い	昭和時代初期	F
12	淡陶	575B	昭和時代初期	F2
13	淡陶	16 色違い	大正時代末	D5
14	淡陶	20	大正時代末	D6

表 1 淡陶社製タイル 14 枚の詳細 裏型の型式は深井（2005、2008、2015）による。



図 4 佐治タイル社製のチューブライニングタイル。裏面には砂を多く含むモルタルが、周囲には目地材となる接着剤が付着している。表面の凸部は著しく摩耗しており、これが床面で使用されていた可能性を示唆する。



図5 月星建陶社製のチューブライニングタイル。表面には家具に取り付けられた際のニスが付着し、裏面には釘止めされた欠けが認められる。

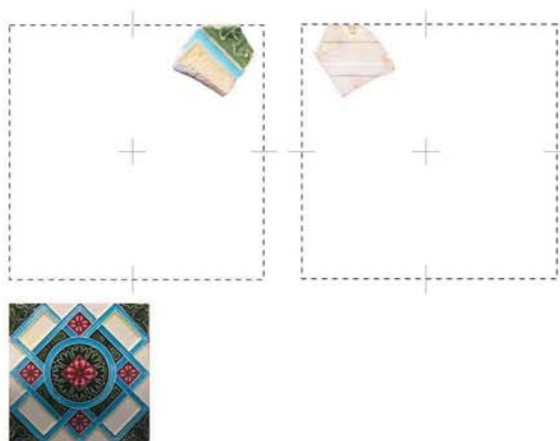


図6 ストーンタウンの海岸(パレス・ミュージアム前)にて、採集したマジョリカタイル片。収集箇所は建築物の瓦礫が多く投棄されており、ザンジバルにおいてマジョリカタイルが使用されていたことの間接的な証拠となる。表面のデザインは日本においても佐治、淡陶、山田、佐藤などのタイルメーカーのカタログに見られるものである(完成形の写真は Pinto-Rodrigues and Lim 2015: 80 に掲載されている佐治タイル社製のもの)。採集したタイル片の裏型からは製造したメーカーは確認できない。



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5

図7 タイルの二次利用の例

7-1. Emerson on Hurumzi ロビーの家具で用いられているもの。左上の1枚は佐治タイル社製の再利用品(裏型は7-2)、他の3枚は大正時代中期の淡陶社製(裏型は7-3)。

7-4. Tembo Hotel 入り口のベンチスペース。日本製が多く含まれると考えられる。

7-5. Dhow Palace Hotel レセプションカウンター。日本製のエンボスタイルが含まれる。

図8 マトゥーカ墓現況



8-1 スルタン家の墓地全景（右下がマトゥーカ墓）



8-2 マトゥーカ墓全景（北東から）



8-3 マトゥーカ墓全景（北西から）



8-4 タイル残存状況（東面）



8-5 タイル残存状況（北面）



8-6 タイル残存状況（西面）



8-7 墓碑（東壁の内面）

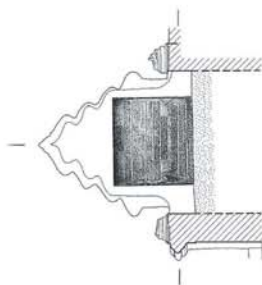


図10-1 裏型a拓本



図10-2 裏型b拓本

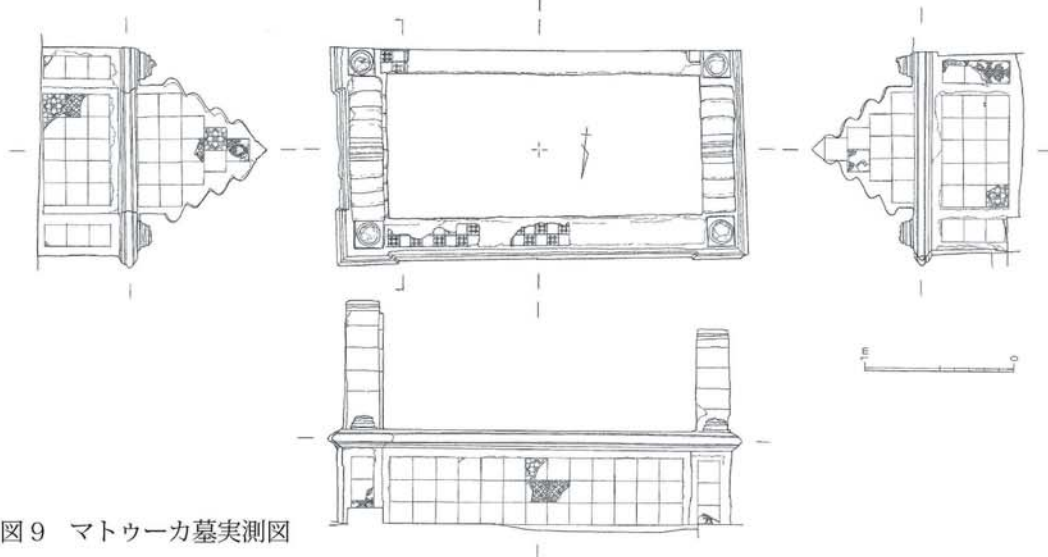


図9 マトゥーカ墓実測図

表2 マトゥーカ墓タイル集計表

使用		造営当初数			表文様判明数 (破片含む)				裏型判明数				生産者判明数 (佐藤化粧煉瓦工場)						
箇所	細部	枚数	小計	合計	現存数	判明数	小計	合計	裏型a	裏型b	小計	合計	枚数	小計	合計				
東面	東面上部	16	37	142	3	3	8	40	12	0	20	86	5	8	28				
	東面下部	21			5	5			8	0			0			3			
北面	北面下部	45	45		6	6	6		35	0	35		10	10					
	西面	西面上部	11		32	0	10		16	1	10		30	0		10			
西面下部		21	6			6	19			0									
上面	上面北側	14	28		7	7	10		0	0	1		0	0					
	上面南側	14			3	3			1	0									
割合 (%)					28.2				60.6				19.7						

表3 マトゥーカ墓のタイル形式と生産者

表面文様型式	使用箇所	文様	カタログ図	裏型型式	裏型刻印	生産者	日本生産者・カタログNo・製品番号
A	東面上部1段			a 横細線+縦横方形区画	不明	不明	川村・No.7・M24 佐治・No.9・834 佐治・不明 (昭和10年頃)・834 佐藤・No.3・100 佐藤・No.10・100 山田・不明・834エンボス (図)
B	東面上部2段 北面下部1・3段 西面下部3段			a 横細線+縦横方形区画	正円内に六芒星・ST 	佐藤化粧煉瓦工場	川村・No.7・M13 佐治・不明・72 佐治・No.9・72 佐治・不明 (昭和10年頃)・72 佐藤・不明・47 佐藤・No.3・82 山田・不明・1 (図)
C	東面上部3段 北面下部2段 西面下部2段			a 横細線+縦横方形区画	正円内に六芒星・ST	佐藤化粧煉瓦工場	川村・No.7・M14 佐藤・不明・43A 佐藤・No.3・52 佐藤・No.10・52 佐治・不明・59 佐治・No.9・59 山田・不明・ (図)
D	東面下部両端 北面下部両端 西面下部両端			a 横細線+縦横方形区画	正円内に六芒星・ST	佐藤化粧煉瓦工場	佐藤・No.10・212 淡陶・No.7-c・1642 (図)
E	北側上面 南側上面			a 横細線+縦横方形区画	不明	不明	佐治・不明・67 佐治・No.9・67 佐藤・No.3・24 山田・不明・9 (図)
F	西面上部2~4段			b エンボス	不明	不明	川村・No.7・M54 佐藤・No.10・227? 淡陶・No.7-c・1628 (図)

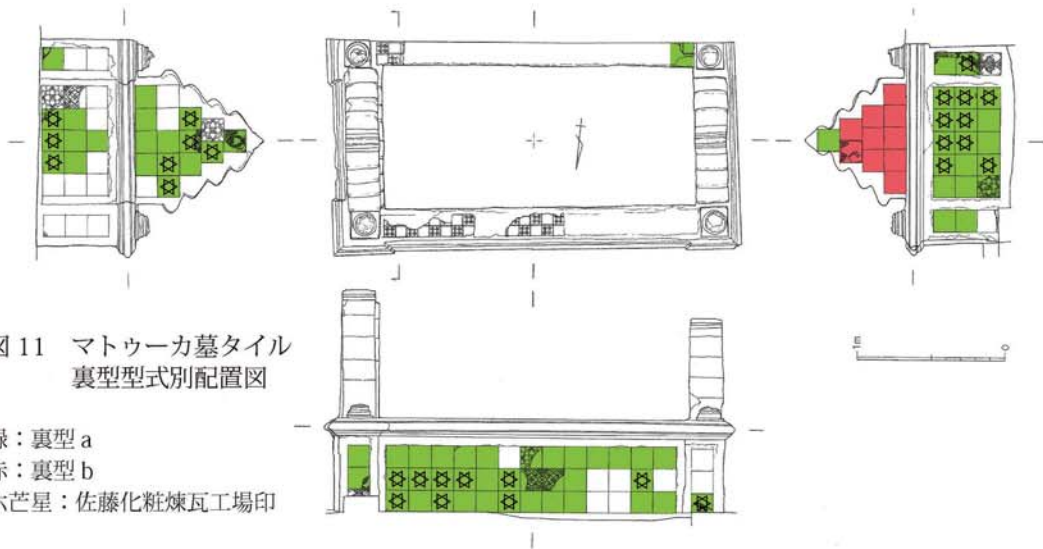


図 11 マトウカ墓タイル
裏型型式別配置図

緑：裏型 a
赤：裏型 b
六芒星：佐藤化粧煉瓦工場印

図 12 マトウカ墓タイル復元図



12-1 タイル復元全景（北東から）



12-2 タイル復元全景（北西から）



12-3 タイル復元全景（東面）



12-4 タイル復元全景（北面）



12-5 タイル復元全景（西面）



図 13 「ストーンタウンの墓地にて、装飾タイルが施されたインド人の墓」と題された写真。1970年の8月に撮影されたとされるもので、周囲の状況や住民への聞き取りから、この写真はボホラ墓地で撮影されたと考えられる。



図 14 ボホラ墓地の北部全景パノラマ（北から）



15-1 1号墓全景（北西から）

図 15 ボホラ墓地 1号墓



15-3 1号墓西端床面のマジョリカタイル



15-2 1号墓西端床面のタイルと剥離状況（6インチ井桁文マジョリカ）

図 16 ポホラ墓地 2号墓



16-1 2号墓全景（南西から） 右モルタル棺が2号、左大理石棺も薄緑タイル



16-2 2号墓床面の薄緑無地タイル



16-3 2号墓床面の薄緑無地6インチ平タイル裏面
菱形「DK」刻印 井桁影り0.5mm

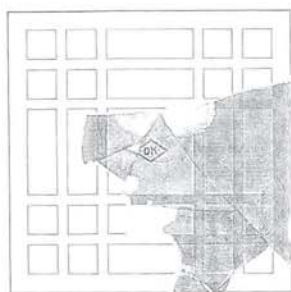


図 17 ポホラ墓地 3号墓



17-1 3号墓全景（南西から）



17-2 3号墓床面の白無地タイル



17-3 3号墓床面の白無地6インチ平タイル裏面
菱形「KY」刻印

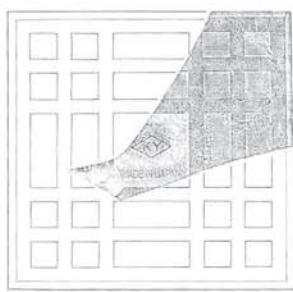


図 18 ポホラ墓地 2号墓、3号墓
墓タイルの裏面拓本

(左) 18-1
2号墓床面の薄緑無地タイル裏面拓本

(右) 18-2
3号墓床面の白無地タイル裏面拓本

図 19 ポホラ墓地 4 号墓



19-1 4号墓全景（北西から）



19-2 4号墓床面の各色の無地6インチ平タイル
右端が灰色のタイル



19-3 4号墓床面の灰色無地6インチタイル裏面
ストライプ「52P SR？」

図 20 ポホラ墓地 5 号墓



20-1 5号墓全景（南西から）



20-2 5号墓床面の白無地6インチタイル



20-3 5号墓床面の白無地タイル裏面 裏型一部はストライプ？